

Citation: Galaal K, Godfrey K, Naik R, Kucukmetin A, Bryant A. Adjuvant radiotherapy and/or chemotherapy after surgery for uterine carcinosarcoma. *Cochrane Database of Systematic Reviews* 2011, Issue 1. Art. No.: CD006812. DOI: 10.1002/14651858.CD006812.pub2.
CRG名: Cochrane Gynaecological Cancer Group

[最新版\(英語版\)はこちら](#)

英語版最終改訂年月: 7 November 2010

Clib issue No.; N/U: 2011 Issue 1 ; New

背景: 子宮癌肉腫はまれではあるが、その診断時に子宮に局限していないものが約35%ある。進行子宮癌肉腫患者の生命予後が再発形式に伴って不良であることから、再発は上腹部及び遠隔転移巣に見られる傾向が強い。

目的: 病期III-IV期の残存または再発性子宮癌肉腫の治療における放射線療法および／または全身性化学療法の有効性及び安全性を評価すること。

検索戦略: Cochrane Gynaecological Cancer Group Trials Register、CENTRAL、コクラン・ライブラリ 2010年第2号、MEDLINEおよびEMBASEを2010年5月まで検索した。また臨床試験登録リスト、学会抄録、選択した研究の参照文献リストを検索し、本分野の専門家に連絡を取った。

選択基準: 子宮癌肉腫女性患者を対象にアジュバント放射線治療および／または化学療法を比較しているランダム化比較試験。

データ収集と分析: 別々にデータを抽出しバイアスのリスクを評価した。メタアナリシスで放射線治療および／または化学療法を受けた女性患者を対象に、全生存および無増悪生存についてのハザード比(HR)を、有害事象の比較にリスク比(RR)を統合した。

主な結果: 3件の試験(女性579例、試験終了時その全例が評価を受けていた)が選択基準に合致した。2件の試験(病期III-IVの残存または再発性子宮癌肉腫の女性373例)では、併用療法を受けた女性の方がイホスファミド単独療法を受けた女性に比べて死亡リスクおよび疾患進行リスクが有意に低かった。悪心、嘔吐を除きすべての報告された有害事象に統計学的有意差はなかった。ただし、悪心、嘔吐はイホスファミド群に比べて併用療法群で有意に多かった。

1件の試験では年齢およびFIGO病期で調整した後、全腹部照射および化学療法を受けた女性において、死亡リスクおよび疾患進行リスクに統計学的有意差はなかった(全生存についてHR = 0.71、95%CI 0.48~1.05、無増悪生存についてHR = 0.79、95%CI 0.53~1.18)。血液学的疾患およびニューロパチーの罹病率を除いてはすべての報告された有害事象に統計学的有意差はなかった。ただし、血液学的疾患およびニューロパチーの罹病率は、化学療法群に比べて全身照射群で有意に少なかった(RR = 0.02、95%CI 0.00~0.16)。

レビューアの結論: 本レビューの結果は2件の試験に限られたものである。進行期転移性子宮癌肉腫の治療の第一選択として、再発の場合同様にイホスファミドとパクリタキセルによる術後補助併用化学療法を考慮すべきである。選択した研究では生活の質に関する報告はなかった。

(監訳 大神 英一)
翻訳公開日: 2011年10月4日

ご注意: この日本語訳は、臨床医、疫学研究者などによる翻訳のチェックを受けて公開していますが、訳語の間違いなどお気づきの点がございましたら、Minds事務局までご連絡ください。なお、コクラン・ライブラリは年12回改訂版が発行されます。Mindsでは最新版の日本語訳を掲載するよう努めておりますが、編集作業に伴うタイム・ラグが生じている場合もあります。ご利用に際しては、最新版(英語版)の内容をご確認ください。